

書き手の視点を捉え、伝える 新聞教育の実践

清瀬市立清瀬中学校

1 はじめに

本校は、清瀬市の市役所、消防署等の公共施設が集中する市中央部に位置し、創立77年目を迎える清瀬市立中学校で最も歴史ある学校である。全校生徒390名、各学年3～4学級の中規模校で、市内中学校で唯一の知的障害固定学級、自閉症・情緒障害固定学級の2つの障害固定学級を併設している。

校内は授業規律が保たれ、落ち着いた教育活動が展開され、部活動や生徒会活動等の自主活動に熱心な生徒が多い。

令和5年度の教育目標の重点は、「正しい判断力と粘りづよい実践力をもった生徒を育てる」であり、目指す生徒像として「自分の考えに自信をもち、他を思いやりながら、自己実現できる生徒」を掲げ、未来社会にも通用する人としての資質・能力を育てている。また今年度は、東京都教育委員会不登校加配事業及び不登校児童生徒調査研究事業校として研究実践しており、不登校生徒に留まらず、全ての生徒が、豊かな学校生活を送るために、安心して学習することができる環境の確保の具現化を図っている。

一方で、令和5年4月に実施した全国学力・学習状況調査では、都や全国の平均値は超えているが、「記述式の回答率が低い」「資料を引用して自分の考えを整理しきれない」「根拠を示して説明することが苦手」等が課題として見られ、生徒の興味・関心を揺さぶる多様

な学習の展開が課題であることが明らかになっている。

2 NIE との出会い

令和4年4月、国は「第6次学校図書館図書整備等5か年計画」を開始した。本計画においては、学校図書館に読書活動に加えて、授業中の探究的な活動に活用する場面が期待されている。

本校ではこのことを踏まえ、まずは令和4年5月より、蔵書の再点検、施設全体の模様替え等の学校図書館の環境整備を行った。理由は学校図書館の情報が古いまま更新されず、生徒にとって学校図書館は、居心地が良い空間ではなく、図書資料、学習空間ともに十分活用していない状況が散見されたためである。また先述した不登校加配事業の別室による支援策として、保健室と相談室に学校図書館をプラスし不登校の生徒でも安心して学ぶ環境を拡充したいと考えたからである。結果、不登校生徒を含む教室等で学習に困難を感じている生徒だけでなく、全ての生徒の“心に寄り



【“心に寄り添う図書館”には夕刊を配備】

添う図書館”へ改善することができた。そして、読書活動の拠点となる「読書センター」機能に、学習支援を行う「学習センター」機能を付加することができた。

2点の機能を有したことで、本校の学校図書館の生徒の活用率は上昇したが、他方、「第6次学校図書館図書整備等5か年計画」で示された図書資料の充実は、課題として残った。

そこで、NIE 実践指定校として実践することにより、複数の新聞社から朝夕刊の新聞が配備され、新聞を読む環境が整うことに加え、最新で専門的、信憑性に高い情報が入手できると考え「令和5年度 NIE 実践指定校」として今年度より実践していくこととした。

3 令和5年度の実践

(1) NIE コーナーにおける取組

①NIE コーナーの設置

NIE を実践するにあたり、本校中学1年生を対象に意識調査を行った。結果は以下のとおりである。

質問項目	はい	いいえ
新聞に触れる機会がありますか	31.1%	68.9%
新聞の読み方を理解していますか	33.3%	66.7%
日常生活で新聞から情報を得ていますか	8.9%	91.1%

質問項目について、さらに考えを尋ねたところ、「大人が読むもの」「昔の人がよく読んでいた」「美術や書写のときに再利用して使う」等、新聞を情報の源泉として認識している生徒は少なく、中には「文字が多くて読むことは苦手」「難しそう」などの抵抗感を意見する生徒も見られた。

そのため、新聞が最初に提供される時機前の6月、日常から気軽に生徒が新聞を手を取

ることができるよう、閲覧場所を工夫し生徒が最も通行する職員室前に、新たに「NIE コーナー」を整備した。このコーナーには、2社ずつ1週間分の新聞(14日分)を収納できる新聞ラックを設置するほか、掲示板には見出し・リード文記事等の新聞の特徴を説明した資料や政治、国際、テレビ欄、文化・芸能、コラム等の新聞の構成について説明した資料を作成し掲示した。



【職員室前にNIE コーナーを新設】

学校図書館のみへの新聞配備ではなく、NIE コーナーを設置したことは「新聞は、昔のものでもなく、大人のものでもなく、今日の話に最も近い、自分たちのもの」へ生徒の意識が変化することにつながった。

②分野別記事のスクラップの掲示

NIE コーナーの整備から1か月が経過し、新聞が新鮮で多様な情報源であることを発信することは実現できたが、閲覧は一部の生徒に留まり、どの生徒も休み時間等を使って楽しんで閲覧するまでには至らない状況だった。そこで7月には、膨大な情報を前にしても気

後れすることなく、多くの生徒が興味をもてるように、分野別に記事をスクラップして掲示するよう改善した。テーマは生徒にとって、①身の回りで発生し、話題となっていること、②興味・関心が高い内容であること、③平易な言葉であること、を優先し自分ごととして捉えやすい「教育」「芸術」「科学」「読書」「スポーツ」の5分野とした。最新1週間の新聞は新聞ラックに収納し、1週間経過した新聞を分野別にスクラップすることで、新聞社から提供される新聞の有効活用を図った。



【5分野別のスクラップ】

スクラップしたことにより、生徒は自分が気になる記事を発見しやすくなりスクラップ記事だけでなく、新聞ラックの新聞を開いて閲覧するようになり、気になる記事について生徒同士で、生徒と先生で交流する光景も見られるようになった。



【左：新聞ラック 右：交流する生徒】

(2) 昼の放送を活用した新聞記事の紹介コーナーの開設

①先生が選んだ記事を、生徒が伝える
NIEコーナーの設置、スクラップの掲示と

段階を追って取り組んだ2カ月後の9月、教科において授業で紙面活用を進めていく計画をした際、周囲の先生たちから「もう少し生徒が新聞紙面に馴染んだ活動を行ってから、教科の学習に活用する方が効果的なのではないか」との声があがった。そこで、特別活動のうち、毎日活動する生徒会活動や学級活動の中にNIEを取り入れ、毎日着替える普段着のように日替わりで毎日、新聞に関わる取組を推進していくこととした。

給食の時間の昼の校内放送において、放送委員会生徒が、先生たちが選んだ記事を紹介する「新聞記事紹介」のコーナーを開設した。この取組は、先生の個性と人間味が伝わり、生徒と先生との距離を縮めることにも一役を買うきっかけになった。そして、NIEを生徒も先生も一緒になって、学校全体で進めていく意識が芽生える大きな一歩となった。



【左：記事を紹介する前に練習する生徒

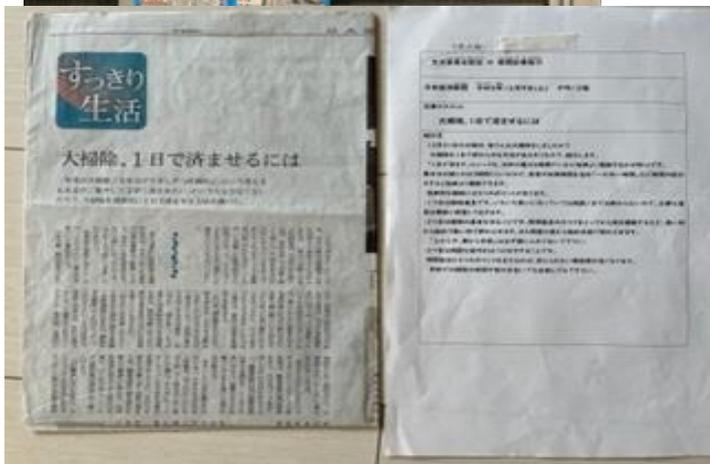
右：自分が紹介する記事を選ぶ生徒】

②生徒が選んだ記事を、生徒が整理し、そして生徒が伝える

11月からは、生徒が選んだ記事の紹介を、放送委員会生徒が昼の校内放送で紹介するようになった。そして本取組は現在も継続中であり、生徒からも大変好評である。

生徒はNIEコーナーに工夫して配置、掲示してある新聞やスクラップから、気になる記

事を選択していく。その際も先に実践していた先生の記事紹介が、①内容が多彩なジャンルに渡っていた、②人権の尊重や平和に関する内容は寛容な心の大切さを実感した、③放送の原稿が生徒にわかりやすい言葉で要約・表現されていた、ことから生徒にとっては「自分の紹介記事は、多様な価値観で選択しても構わない」という情報選択の土台づくりとなった。生徒は本取組を通じて堂々と記事を選び、自信をもって発信することができている。



【上：生徒が選んだ記事をフォルダーで掲示
下：生徒が選んだ記事と放送した原稿】

新聞記事は、同じ事実を扱った記事でも、新聞社－書き手によって切り取り方が違い、表現も違う。複数社の新聞を読み比べて多様な考え方に触れることは自分の考えや思いを確かなものにしていく。また多彩な紙面は、見出しによって読み手の目に留まり、リード文で信憑性の高い情報に出会い、記者が伝えたかった世界に引き込まれていく。

本校生徒は、新聞紙面のあふれる言葉の中から自分が感じた言葉を選び、記者－書き手

が伝えたい事柄とキャッチボールができるようになりつつある。

（3）国語科「説明的文章」の実践

国語は、言葉で伝え合う能力を育成することや言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する教科である。言葉の宝箱である新聞は、国語の学習教材の入口にもなると考え、本校では国語科で現在、NIEの学習を深めている。特に指導の中では、書き手が情報を伝える際に限られた文章量に対して、どのような言葉の工夫をしているか、情報を精査しているか等を理解できるようにしていきたい。そして書き手の意図を創造する力、自身が読み取ったり考えたりした内容を表現する力を養っていきたい。

4 成果と課題

（1）成果

全校でじっくりと新聞に親しみ、楽しむことを優先し実践したことにより、生徒の広報活動が活発になった。「新聞記事の紹介」を放送委員がスタートしたのは配備された新聞を直接活用した活動であるが、全般で生徒会新聞や委員会の新聞、また学校行事の実行委員会等による生徒広報紙の発行数が増加した。事象に対して正確に事実を伝え、情報を共有しながら意識を高めていくことに広報が有効であることを生徒は身に付けたようである。

（2）課題

国語科にとどまらず、他教科の授業において新聞紙面を活用した取組を展開していくことが今後の課題である。また、多彩な言葉で構成される新聞は、個別最適な学びへの活用にも期待ができると考える。国語科の実践を契機に、教科指導における効果について広めていきたい。